
魔導新世紀リリカルなのは

ゼロの風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔導新世紀リリカルなのは

【Nコード】

N5433Q

【作者名】

ゼロの風

【あらすじ】

過去に起きた事件の生き残りである少年は、自分を我が子のように育ててくれたプレシアを止める為、そして自分の記憶を取り戻す為戦う

第1話新たな魔導物語（前書き）

これはある一つの分岐で出来た世界の物語…

第1話新たな魔導物語

目が覚めると、少年はある場所で寝ていた

「あっ、起きたんだね」

一人の少女が、少年が起きた事に気づいて、近づいてくる。だが今の少年は記憶がはっきりとしておらず近づいてくる少女が何者なのか分からなかった

「おはよう、スウェン」

（スウェン：それが僕の名前なのかな？）

再び少女を見ると、自分に出会ったのが懐かしいのか、ずっと抱きついていて。すると、ドアが開き一人の女性が来る

「あっ、お母さん！！」

「アリシア、スウェンの様子は？」

「今、起きたよ。それでそっちの男性は誰？」

「私は、ジェイル・スカルエッティ。君のお母さんプレシア・テスタロッサの助手だよ」

スカルエッティが手を出すと、アリシアは少し警戒しながら握る。その後、スカルエッティはプレシアと何かを話し、スウェンの元に来る

「久しぶりだね、スウェン」

だがスウェンの記憶には、スカルエッティの事はなく頭の上に疑問符が出る

「記憶が無いのも無理はないか：それより体調はどうかな？」

「一応、記憶が混乱している以外は異常はありません」

スウェンが言うと、スカルエッティは笑って部屋を出て行く。その後、プレシアはスウェンに近づき話し合う

「スウェン、私の事、覚えているわよね」

確かに、プレシアによく似た女性の記憶はあったが、それが本人なのか分からずスウェンは黙りこむ

「アリシア、スウエンの事お願いね。母さんはちょっと用事が出来たから…」

「うん、スウエンの事は任せといてよ」

アリシアはプレシアに言って、プレシアは笑顔で出て行く

「スウエン、聞こえる？」

「うん、聞こえるよ。確かアリシアだったよね」

スウエンが言うと、アリシアは少し怒った顔でスウエンを見る。だが当のスウエンは何故アリシアが怒っているのかが分からなかった
「本当に記憶が無いの？」

「うん、何も思い出せないんだ…」

「じゃあ、あの時の事も？」

「えっ、あの時？」

スウエンは一生懸命記憶を探り、アリシアとの約束を思い出そうとするが、思い出せずアリシアも悲しそうな顔をする

「ごめん、アリシア」

「別にいいよ。ただ一言だけ約束して、今度は私の傍にいて…」

「うん、約束するよ。絶対に君の傍にいる何があろうとも…」

スウエンが約束して、アリシアは笑顔でスウエンに抱きつき耳元で
ある言葉を囁き、自分の部屋へと戻っていた

第1話新たな魔導物語（後書き）

新しい物語のスタート！！

次回第2話失う命そして海鳴へ：

失うものそれは少年の記憶を閉ざした

第2話失う命そして海鳴へ…（前書き）

失うものそれは少年にとって、ようやく出来た絆だった。
ちなみに、1話の時点で5歳それから2年後の話です

第2話失う命そして海鳴へ…

あれから2年後、スウェンは少しずつ記憶を取り戻し現在は、プレシアの元で暮らしていた

「ほら、スウェン野菜も食べなさい」

「えっ、さっきから食べてますよ？」

スウェンが言うと、隣にいたアリシアがスウェンのお皿に野菜を入れていた

「アリシア、いつもは食べているじゃないどうしたの？」

「何か、食欲がないの、ご馳走様」

ほとんど朝食を残し、アリシアは部屋へと戻って行く。プレシアは心配になりスウェンだけその場に残しアリシアの方に向かっていく
「入るわよ、アリシア」

ドアをノックし、プレシアが入るとベッドの上で横になるアリシアがいた

「どこか具合でも悪いの、ならすぐにお医者さんに見せないと…」

「平気だよ、だからしばらく一人にしてくれないかな？」

「でも…」

「お母さん、お願い」

アリシアに言われ、プレシアがリビングへと戻ると、ご飯を食べ終えたスウェンが食器洗いをして、魔法の勉強をしていた

「スウェン、あなたアリシアに何があったか知らないかしら？」

「えっ、知りませんが、アリシアどうかしたんですか？」

「やっぱり、あなたのせいじゃないのね…」

「？」

スウェンは訳が分からず首を傾げる。するとプレシアは難しそうな顔をして、スウェンにアリシアを任せ出て行く

（アリシアの事、お願いって言われても、なにをすれば…！？）

なにかを感じ取り、スウェンがアリシアの元に向かうと、アリシア

の悲鳴が聞こえた

「放して、誰か、助けて!!」

「黙れ!!」

なにか鈍器のようなもので打たれた音が聞こえ、スウェンが入ると血だらけのアリシアが寝ていた。ベッドは血で赤くなり、徐々に鼓動も小さくなっていた

「あっああ、アリシア…」

「泣かないで、スウェン…私が悪いんだから」

血の付いたアリシアの冷たい腕が、スウェンの頬を触りスウェンの頬にアリシアの血が付く

（僕のせいだ…僕がもっと早く来ていれば…）

スウェンが自分を責めていると、アリシアは最期の力を振り絞って、立ち上がりスウェンの唇にキスをする

「生きてね…私の分も…スウェン」

「目を開けてよ、アリシア…アリシアー!!」

スウェンにも死んでいる事はわかったが、認められずスウェンはアリシアの傍で泣いた。そしてそれからプレシアも来てスウェンを見る

「あなたがアリシアを殺したの？」

「違う…僕じゃない」

「嘘を言わないで!! あなたを育てた恩を仇で返すのね、スウェン!!」

「違うんです、僕じゃ…ない」

スウェンは必死で説得しようとするが、プレシアはスウェンが殺したと思いこみ決してスウェンの言葉に耳を貸そうとはしなかった

「母さん、僕は」

「出て行って、あなたの様な人殺し、私は知らないわ!!」

「わかりました、今までありがとうございました」

もう誤解が解けない事が分かりスウェンは、お礼をして何の荷物も持たず家を出て行く

（僕は…何処に行けばいいんだ?）

家族の顔もそれに自分の出世も知らぬスウェンに帰る場所はなく、近くにあった公園のベンチに座る。

流石に空腹が限界に来ており、お腹は鳴り眠気が襲ってくる

（いっその事、ここで死んだ方がいいのかな？）

スウェンがそんな事を考えていると、追い打ちをかけるように雨が降って来てスウェンの体力を奪う

（ハアハア、寒い…）

既に体は冷え切りスウェンは雨をしのげる場所を探すが、どこにも見当たらず一人の女性にぶつかる

「あっ、すみません…」

「別に平気だよ、それにしても君はどうしてそんな悲しそうな心をしているの？」

「えっ…どう言う事ですか？」

スウェンが聞くと、女性は笑って少年をある場所へと転移させる

「ちょっと待ってください…あなたは？」

「海鳴で待っている…あなたの大切な人がね」

「えっ、どう言う事!？」

スウェンが聞こうとすると、光に吸い込まれ消える

「これでいいのかね、君は？」

「後悔はしていません、それより彼の記憶は？」

「大丈夫だ、すべて消去してある。それよりも問題は君自身だろう…高町なのは」

「その名前は捨てました…今の私は彼の遺志を継ぐ、星の旅人ですよ」

女性が言うと、スカルエッティは少しだけ笑い空を見て、少年の無事を祈った

第2話失う命そして海鳴へ…（後書き）

プレシアに拒絶されたスウェンそして全ての記憶を無くし本当の始まりへ…

次回第3話新しい家族？

海鳴であつた少女それが少年の運命を大きく変える

第3話新しい家族？（前書き）

この小説は、マジカル・ウォーズの続きです。さらに、1話と2話は後から描き足します

注意：若干キャラクターの言葉遣いや性格が変更されているかもしれませんが予めご了承ください。もう一つこの小説は多くのオリジナルストーリーで進みますなので本編では出るキャラが出なく、オリジナルキャラクターが多数登場する事があります

第3話 新しい家族？

地球、海鳴市

「こんな所で、寝ていると風邪ひくよ？」

ポンッと肩を叩かれ少年が目覚ますと、横には自分とあまり年の変わらない栗色の髪の少女がいた

「えっと、君は？」

「私はなのは、高町なのはだよ！！」

なのはは、少年に自己紹介して、少年もなのはに自己紹介をする

「僕はスウェン、それでここは一体？」

「ここは日本の海鳴市だよ、君はどこから来たの？」

「僕は…分からない」

スウェンが言うと、なのははスウェンをじつじつと見る

「僕の顔に何か付いているかな？」

「えっ、別になにも付いてないよ。ただ何か懐かしい感じがしたから…」

なのはの感じた物は自分も感じていたが、どこで感じた物なのかは分からなかった

「ねえ、君は帰る場所はあるの？」

「えっ、無いよ。もしかしたら、あったのかもしれないけど…」

「じゃあさ、私と一緒に来ない？」

突然の言葉にスウェンが驚くと、なのはは笑顔で「どうかな？」と聞いてきた。そしてスウェンはしばらく悩んだ挙句に頷き、なのはについて行く

「そうだ、スウェン君。私の事はなのはって呼んでね」

「うん、わかったよ。なのは」

「じゃあ、行こうか…」

なのはと話しながら、歩いて行くと表札に『高町』と書かれた家へと着く。そしてスウェンはなのはに連れられ入ると、一人の女性が

来る

「ただいま!!」

「お帰りなさい、なのは。そっちの子は？」

「この子は、スウェン君って言って、記憶喪失なんだって」

「あら、そうなの。私はなのはの母で桃子って言うのよろしくね、スウェン君」

差し出された手を握り、スウェンは少しだけ顔を赤くして頷く。それから夜になり、スウェンは一応、桃子の許可を得て、高町家にいた「僕はここにいてもいいんですか？」

「大丈夫、大丈夫きつとお父さんもお兄ちゃん達も認めてくれるから」

なのはに言われるが、スウェンは心配だった。そしてなのはのお父さんである士郎とお兄さんである恭也が帰ってきた

「あれ、美由紀は一緒にいなかったの？」

「今日は遅くなるって言ってたし、デートなんじゃないか？」

二人は服を着替えて、改めてリビングへと来る

「そうだ、2人になのはから相談があります」

「何だ、欲しいゲームでもあるのか？」

「違うよ〜お話って言うのはね、この子をこの家に住ませてもいいかなって事なんだよ」

「その子はスウェン君と言ってね、過去の記憶が無いの。だから記憶が戻るまでは、私達で育ててもいいと思うのだけど…」

なのはと桃子に言われ、恭也と士郎が考えていると、玄関が開く音が聞こえ美由紀が帰ってくる

「ただいま…えっ、この子誰!？」

なのはから訳を聞き、美由紀はスウェンを見る

「私は賛成するよ。だってこの子帰る場所が無いんですよ、それに記憶が戻るまでだったら大丈夫だと思うよ」

「そうだな、僕も賛成するよ。お父さんもそれでいいよね」

「まあ、仕方が無いかそれにここでこの子を追い出す理由はないし

な…」

家族全員が納得し、スウェンはお礼をする

「ありがとうございます」

「じゃあ、ご飯食べようか」

「そうね、美由紀や恭也も疲れているものね」

ご飯を準備して、ご飯を食べた後、スウェンは士朗とお風呂に入り
今は使われていない部屋を貸して貰って眠りについた

第3話新しい家族？（後書き）

新しい家族そして生活だがそれを壊すようにある物が海鳴に落ちてくる

次回第4話落ちてきた禁句の力
それは：ロストロギア！！

第4話落ちてきた禁句の力（前書き）

3話から2年後の話で、何故かユーノがいます
さらに多少ジュエルシードの設定が変更していますちなみに意味不
明の言葉は横に訳が書いてあります

第4話落ちてきた禁句の力

あれから2年後、海鳴市

「どう、スウエン少しは慣れた？」

「はい、一応は…」

「それにしても、美由紀はずっとユーノを抱っこしてるわね」

「だってかわいいだもん……」

頬ずりをして、ユーノを可愛がっているのは分かるが、ユーノはスウエンに助けを求めている

「キュ~~~~ウ」（スウエン、ヘルプ!!）

（あれは、助けた方がいいのかな？）

助けを求めている事はわかったが、美由紀からユーノを奪う勇氣はスウエンにはなくずっと見ていた

「美由紀、明日はテストだろ。勉強はいいのか？」

恭也に言われ、美由紀はユーノを離し、自分の部屋へと戻って行く

「スウエン、なのはを知らないか？」

「えっ、今日は友達の家に行くって言ってましたよ」

「そうか、じゃあ父さんの手伝いに行ってくる」

恭也は家から出て、士朗の働いている翠屋へと向かう

「キュウウウウ!!」（さっきは良くも、僕を見捨てたね）

「ごめんってば、そんなに怒らないでよ。ユーノ」

あの時、助けてくれなかったスウエンに敵意をむき出しにして威嚇する

「スウエン、お使い頼んでもいい？」

「何か買ってくるんですか、桃子さん」

「えっと、この紙に書くから、ちょっと待ってて」

ペンをとり紙に書いて行く。そしてスウエンに渡しお金も渡す

「じゃあ、よろしくね」

「はい、じゃあ行こうか。ユーノ」

「グオオオオ!!」(ちよつ、お前無視すんなああああ!!!)

「危ないよ!!」

スウェンが言うが、目の前の少女は避けようともせず、手のひらを化け物の前に出す

「君みたいなの、二級の物に興味はないんだ。滅んで!!」

手のひらから出た光の弾により、化け物は消滅し、紫色の血が降り注ぐ

「スウェン、会いたかった」

(えっ…)

急に抱きつかれ、スウェンは抵抗も出来ずただ抱かれていた。そしてタイミング悪くなのはが来る

「なの~~~~~!!」(スウェン君に、なにしてるの~~~~~!!!)

「なのは、ちよつと落ち着いて」

ユーノに言われ、ようやく落ち着きなのはは少女を睨む

「君は一体、誰!!」

「私はフェイト・テストロッサ、母さんの命令でスウェンを取り戻しに来たんだよ」

「なの~~~~~」(意味が分からないよ)

「今のなのはの方が、わけわからないから…」

スウェンが言うのと、なのははユーノから受け取ったレイジングハートを起動させBJを装着する

「返してもらおうよ、スウェン君を!!」

「君、程度の腕で私と戦えると思っているの?」

フェイトも自分のデバイスを展開し、なのはを睨むと同時に後ろに回り込んで斬る

「ガハッ!」

訳も分からないまま斬られなのはが倒れると、フェイトはデバイスをなのはに向け形体を変える

「私とスウェンを邪魔するなら君は死ぬ!」

攻撃をしようとする、さっきの化け物より一回りでかい化け物が
出てきてフェイトを殴り飛ばした

第4話落ちてきた禁句の力（後書き）

傷つくなのはそしてフェイトそしてスウェンの中である記憶が蘇り
次回第5話魔導師、覚醒！！

蘇る記憶そして消せない罪それでも大切な物を守る為少年は戦う

第5話魔導師、覚醒!! (前書き)

傷つく仲間達そして目覚める記憶、今ここに魔導師誕生!!
5話が終了した後、1話、2話を投稿します

第5話魔導師、覚醒!!

（あの子が、危ない!!）

フェイトに斬られた場所を押さえながら立ち上がり、レイジングハートを向ける

『ターゲット、ロック完了。行きます!!』

「デイベイン…バスター!!」

なのはは、放つが反動が凄く後方に吹き飛ばされる。そしてピンク色の魔力砲は真っ直ぐと化け物へと向かうが、化け物は片腕で止めその攻撃をなのはへと返す

『マスター、危険です』

「わかっているけど、体に力が入らない」

なのはは何とか、立ち上がろうとしたが、体に力が入らず無理に入れようとすると、フェイトに付けられた傷口から血が出て立ち上がれなかった。だがそんななのはの事などお構いなしに、化け物の跳ね返したデイベインバスターは真っ直ぐとなのはに向かっていった

（どうしよう…このままじゃ、なのはが!?!）

なのはを助ける為に動こうとすると、何かが確かに呼びかけていた。そして目が覚めると、先ほどまでいた場所ではなく人の死体がいくつも積み重ねられた場所だった

「ようやく来たんだね…あの人の遺志を継ぐ新たな者が…」

「えっ、あなたは一体…」

「私は、星の旅人。君には誰か守りたい人がいるよね？」

謎の質問に、スウェンが首を傾げる。すると目の前の女性はスウェンの額に手を当てる

「これは…僕の記憶？」

「君は大切な者をまた失うの？」

「えっ、どう言う事ですか？」

「これを君に託す。後は自分で決めて、自分の罪を背負い生きるか

それとも、その罪すらないものとして生きるかね…」

女性はスウェンにデバイスを託すと、消えていく。そしてスウェンは涙を拭き、デバイスを握りしめる

（僕の罪…それは多分戦う度に増えていく。でも今ここで戦わなかったら、守らなかつたら多分後悔どころじゃ済まなくなる）

強く握り、目を閉じて願う。すると暖かい光がスウェンを包み、そしてすべての記憶が呼び覚まされる

「アリシア、僕は生きるよ。君を殺した罪も、これから起きる罪もすべて背負ってだから僕は…!!」

（それが、ZEROのいや聖剣士の使命だよ）

一瞬、アリシアが自分に呼びかけた感覚を感じた。だがスウェンが目を覚ますと既にBJを装着しなのはに迫るディバインバスターを受け止めていた

「グガゴガゴ」（何者だ、貴様？）

化け物も突然、感じた新しい魔力反応に驚きを隠せず、煙が上がっている方を見ると一人の少年が左腕を前に出し立っていた

「スウェン君、その姿は？」

「これは僕が君から受け取った姿だよ。いや正確に言えば、別世界の君かな？」

「？」

なのはは訳も分からず首を傾げる。だがスウェンは既にデバイスをしっかりと握り、化け物に狙いを定めていた

『対象の魔力反応、増大…大型の魔力反応来ます!!』

「ならこっちも高威力魔法行けるね…エグゼキューター!!」

『問題ありません。行きます、シュートモード!!』

先ほどの剣から銃へと変形し、スウェンは腕に装着する

「撃ち抜く…デイス・バスター!!」

エグゼキューターから放った魔力砲は、化け物を取り込み次元が消滅し化け物がいた場所に蒼い宝石と欠片が散らばる

『敵性反応消滅…BJを解除します』

BJを解除して、スウェンは化け物により吹き飛ばされていたフェイトの元に来る

（なんでだろう、この子はアリシアの感じがする）

スウェンが触れようとすると突然、横から吹き飛ばされる

「グッ：君は、一体」

「あんたに名乗る名は無いよ。それじゃ、フェイトは連れて行く」

「ちょっと、待ってよ!？」

手を伸ばすが、突然来た激痛に体が悲鳴を上げ、意識が消えて行った

第5話魔導師、覚醒!! (後書き)

全ての記憶を取り戻したスウェンそして、その事を知ったプレシアはスウェンを手に入れようとする

次回第6話幸せな時へ：

自分の罪それさえ背負い再び戦う事を決意する

第6話 幸せな時へ…（前書き）

プレシアの命令それに逆らえず、フエイトは自分の思いを殺し自分の母さんの為に戦う

第6話 幸せな時へ…

あれから1日後、時の庭園フェイトはあの後、使い魔であるアルフに連れられその場所に来ていた

「お帰りなさい、フェイト」

「母さん、ごめんなさい。ジュエルシード取ってこれませんでした…」

「いいのよ、あなたが無事ならそれで、フェイトあなたにお願いがあるの」

「何ですか、母さん？」

フェイトが聞くと、画面にスウェンが映し出される。そしてプレシアはフェイトにとって残酷な事を言う

「フェイト、彼をここに連れてきなさい」

「えっ、母さんどう言う事…スウェンを連れてこいなんて」

「彼は私の計画に必要不可欠なのよ。だからお願い、フェイトこれ以上、母さんを苦しませないで」

フェイトは迷う。母さんの言う計画の全貌は知らないにしろ、確実にスウェンが死ぬのが目に見えていたからだ

「どうしたの、フェイトまさか母さんの言葉が信じられないの？」

プレシアの役に立ちたい。その気持ちが揺らぐ事は無いが、スウェンへの想いも否定できずフェイトは苦悩する

「母さんは、スウェンをどうする気ですか？」

「あなたが気にする事ではないわ。あなたは母さんの言う事を聞けばいいのよ」

半ば洗脳に近い言葉をかけられ、フェイトはプレシアの想いに答える為、スウェンへの想いを封印し、海鳴へと向かう。その頃、海鳴では、なのはに連れられスウェンはなのはの親友アリサの家に来ていた

「これで12連勝目!!」

「あゝ負けちゃった」

最近出た、対戦ゲームをして、なのはとアリサは対決しており、スウェンともう一人の親友すずかは二人がゲームをしているのを横で見ている

「すずかとスウェンはやらないの？」

「ちょっとまだ、操作が良く分からないし、なんか複雑そうだから…」

「なのはちゃんとアリサちゃん楽しんでいいよ。私ももうちょっと見てるから」

「わかったわよ。じゃあ、なのは13戦目行くわよ!!」

お互いにキャラクターを選び戦う。流石に13回目と言う事でなかなか決着がつかずお互いに一步も譲らない互角の戦いを繰り広げていた

「なかなかやるわね…なのは」

「えへへ…じゃあ本気で行くよ!!」

なのはの操作するキャラクターが、急に強くなり一撃また一撃と確実にアリサのキャラにダメージを与えて行く。だがアリサはピンチになればなるほど、余裕の笑みを見せ、なのはのキャラが最後の一撃を当てようとすると、アリサのキャラが突然消えなのはの負けとなる

「えっ…どう言う事？」

「ファイナルスキルよ。このキャラクターの場合、体力が200を切ると、一回だけ敵の攻撃を完全回避し一撃当てられるのよ」

「えゝゝゝそんなの聞いてないよゝゝゝ」

なのはが、がっかりすると、ようやくルールを把握したスウェンがアリサと対決するが、あっさり負けてしまう

「やっぱり、アリサには敵わないよ…」

スウェンが言うと、今度は違うゲームをなのは出しアリサと対決する。そんなこんなしている内に、帰る時間になりなのはとスウェンはアリサとすずかにお別れを言って家へと帰って行く

「どう、楽しかった？」

「うん、今日はありがとうなのは」

スウェンが笑顔で言うのと、なのほも笑顔になりスウェンに話しかける

「でも、なんでまだ私と一緒にいるの？」

「記憶を取り戻したけど、僕には帰る場所が無いからさ…それに僕にとつての帰る場所は君がいるここだから」

（えっ、それって…）

急になのはの顔は赤くなっていく。そしてスウェンの顔を見ると、ユーノから念話が来る

「聞こえる。二人とも？」

「どうかしたの、ユーノ君？」

「もしかして、ジュエルシード？」

「それに近い反応だけど、確認してくれるかな。僕もすぐ行くから」
二人は承諾し、ユーノに指定されたポイントへと向かう。すると、前に戦った化け物より一回り小さい化け物と前に出会ったフェイトが戦っていた

「行くよ、バルディッシュュ!!」

デバイスを構えて、フェイトは攻撃を避けながら、魔力弾を撃ち込み少しずつ弱らせる

「グオオオオ」(チッ：ちょこまかと…)

化け物は無理に追う事はせず、隙を狙うが、一向に現れずいつの間にか体の自由を奪われていた

「グオオオオ!？」(なっ…貴様!?)

身動きが取れず暴れる化け物に、フェイトはデバイスを向ける

「ジュエルシード封印!!」

バルディッシュュより放たれた一筋の閃光は、化け物を貫き蒼い宝石をデバイス内に吸収する

「封印完了。ナンバー14」

「お疲れ様、バルディッシュュ」

BJを解除し、フェイトは降りてくる。そしてなのはを睨んだ後、

スウェンを見る

「一緒に来てくれないかな？」

「えっ…どう言う事？」

「母さんに頼まれたんだ。スウェンを連れてくるようにって、だから付いて来てくれない!!」

「!？」

突然、スウェンの頭にプレシアの映像が浮かび、自分の意思とは関係なくフェイトに手を伸ばしていく

「さあ、行きましょう。あなたと私の幸せの時へ…」

「嫌だ、僕は戻りたくない…」

頭で拒否をしようとも、体は言う事を聞かず、フェイトの手を握り、二人は光となり消えた

第6話幸せな時へ…（後書き）

消えたスウエンそしてなのはは、スウエンの行方を捜す為、ジユエルシードを集めて行く

次回第7話プレシアの目的

それは過去に戻る事…？

第7話 プレシアの目的（前書き）

過去に戻り、全てを戻す事それが目的…？

第7話プレシアの目的

時の庭園と呼ばれる場所スウェンは、目が覚め自分の今の状況を見る。腕は拘束され、体の自由は奪われ、デバイスは、スウェンの横にある箱の中に嚴重に保管されていた

「ようやくお目覚めね：スウェン」

目の前にはあの時、自分を捨てたプレシアがいた

「いまさら僕に何の用ですか：あなたは僕を捨てたんですよ！！」

「そうね、その事実は否定できないわ」

「僕はあなたを実の母のように思っていました。そしてそれはあなたも同じだったのでしょう！！」

「そう、全ては私が悪いのよ、アリシアが死んだショックであなたの事を捨てて本当に悪いと思っていますわ。スウェン」

プレシアが言うと、スウェンはプレシアを拒絶の目で見る

「あなたは一度、僕を捨てたんですそんな人をもう一度信用しろと言うんですか？」

「あなたが私の事をどう思おうと構わないわ。ただあなたには聞いてほしいの、私の目的を…」

「あなたの目的？」

「そう、私の目的それは、ジュエルシードの力で過去に戻る事よ。そしてまた3人で幸せに暮らしましょう」

プレシアは手をスウェンに差し出すが、スウェンはその手を握る事はせずプレシアを睨む

「過去に戻り、そして全てを無かった事にして、生きるという事ですか」

「そうよ。あなたもアリシアに会いたいですよ…」

「アリシアは、もう死んだんです。その事実はいくら過去に行っても消えません。それにそれは逃げているのと同じです」

「スウェン…どうしても分かってくれないのね」

プレシアは先ほどの優しい顔からスウェンを睨み手に持つ鞭でスウェンを叩く

「もういいわ、あなたはつまり私に協力できないという事ね…」

「そうです。それにあなたにはフェイトがいるじゃないですか？」

スウェンが言うのと今までよりもっと怖い顔でスウェンを睨み力の限りにスウェンを叩く

「あんな人形：娘だと思った事は一瞬も無いわ。今度、私の前でその名前を言ったらあなただろうと殺すわよ！！」

プレシアが出て行くと、スウェンを拘束していた金具が外れ、血を吐く

（フェイトが人形：どう言う事？）

プレシアの言った言葉の意味が分からず、スウェンが考えていると、悲しそうな顔でフェイトが来る

「母さんにやられたんだね、大丈夫。スウェン？」

「僕は平気だよ、それよりフェイトはなんでプレシアの為に戦うの？」

「私は、母さんに見てほしかった。でも母さんはいつも私じゃなく違うなにかを見ていた、私を褒める時も…」

（プレシアの言っていた、人形とはそういう意味だったのか…）

これでフェイトが自分の事を知っていた事、そして自分を守ると言った事が分かった

（この子は、アリシアを元にしたクローン人間なんだ…）

だが本人に言う事は出来ず、スウェンはフェイトについて行くその頃、スウェンの手がかりを探す為になのははジュエルシードを集めていた

「ハアハア、これで13個目」

既にボロボロになっているなのはを心配しながらユーノは見ていた

「なのは、少しは休んだ方が…」

「私なら平気だよ。ユーノ君、それよりもスウェン君の魔力反応は？」

「全く感じないよ。それにいくら頑張っても見つかるとは限らない」
「でも、何もしないよりはましだよ!？」

なのはが歩こうとすると、突然意識が無くなり倒れこむ。そしてある男の子に背負われ、なのはは自分の家へと戻った

第7話プレシアの目的（後書き）

プレシアの計画の全貌を知ったスウェンはフェイトを逃がす為、ただ一人で立ち向かうそしてその頃、1隻の次元航行艦が海鳴へと向かっていった

次回第8話管理局

プレシアの目的の障害それは…フェイトだった

第8話管理局（前書き）

たった一つの障害それはフェイトだった

第8話管理局

次元航行艦アースラ内、オペレーターであるエイミィは、艦長が不在の為、代理の艦長であるクロノに現状を報告する

「こっちは問題ないよ、今回も何事もなく終わりそうだね」

「そうだいいがな…」

何故か、クロノは不安を感じていた。だがその不安がどこからくるものなのかは分からなかった

「エイミィ、艦長は？」

「多分、艦長室だと思うけど何か気になる事でもあるの？」

「ちよっとな…何か異常があったらすぐに知らせてくれ」

エイミィが、承諾したのを確認すると、徐々に強くなっていく不安感を押さえ艦長のいる場所へと向かう

「失礼します」

部屋をノックし入ると、この艦の艦長であるリンディがいた

「どうかしたの、クロノ執務官？」

「突然、すいません艦長。急ぎの用事でして…」

「別に構わないわよ。それで急ぎの用事というのは？」

クロノが自分を感じている不安を話すと、リンディも難しい顔になる。そしてそれからすぐに警報が鳴りエイミィから連絡が来る

「どうした、エイミィ!!!」

「第97管理外世界から膨大な魔力反応感知。これはロストログアです!!!」

「なんですって、クロノあなたの感じた不安はこれだったのね」

クロノは少し違う気もしたが、一応頷き偵察に向かうその頃、時の庭園内スウェンは、プレシアの極秘研究室に忍び込み、今回の計画の全貌を確認する。そしてその後、気付かれないように、自分のデバイスを取り出し計画を立てる

（プレシアは多分、僕とジュエルシードをシンクロさせることで、

過去への扉いや違う：禁断の地アルハザードへの道を開くつもりなんだ。そしてその為には：)

フェイトの寝ている部屋を見て、スウェンは確信する

「アリシアと同じ存在であるフェイトは障害でしかない。そしてきつと、プレシアはフェイトを殺す気だ」

スウェンはデバイスを強く握り、フェイトを逃がす為にアルフに話す
「アルフ：お願いがある。フェイトを連れて海鳴に向かってくれな
いか？」

「どう言う事だい、スウェン？」

「今理由を話している時間は無い：絶対に逃がしてね」

スウェンはアルフに頼み時の庭園の最深部にいるプレシアの元に向かう

「やはり来たわね、スウェン」

「プレシア、あなたは過去ではなくアルハザードに向かう気ですね」

「そうよ、そしてそこで禁断の秘術を使い、アリシアを復活させる」

「なら、僕はそれを阻止する！！」

エグゼキューターを剣にして、プレシアに挑むがプレシアは霧になり消えスウェンの後ろに回り込む

「そんな腕で、フェイトを守る気なのかしら？」

「やはり、あなたはフェイトを殺す気なんですね」

「あんな偽物よりも、アリシアの方がいいでしょスウェンあなたも
！！」

「グッガハッ：」

ただ一度鞭で打たれただけなのに、激痛が全身を襲いスウェンの目からは血が出る

「苦しいでしょう：もう楽になりなさい」

もう一撃食らいスウェンは気を失う。それから、フェイトはアルフと共に時の庭園を脱出していた

第8話管理局（後書き）

フェイトを逃がす為にプレシアに捕まるスウェンそしてフェイトは
なのは達の力を借りずに一人でスウェンを助けに行こうとする

次回第9話友達になる為に：

始めよう：私と君の本気の勝負！！

第9話友達になる為に…（前書き）

協力を呼びかけるクロノ達だがフェイトはクロノ達の言葉に耳を傾けはしなかった

第9話友達になる為に：

フェイトが、時の庭園から逃げ出して1日後。大体の事情をアルフから聞いて、スウェンを助けに向かおうとする

「フェイト、一人で行っても無駄だよ」

「私のせいで、スウェンは捕まったんだ。だから私が助けないと…」
フェイトは自分のせいだと思い込み、断じて協力などしないの一点張りだった

「だが、君一人でどうする気だ？」

「助けてくれた事には、感謝しています。ですがこれとそれとは話が別です」

「どうしても一緒に戦う気は無いと言う事ね、フェイトさん」

リンディが聞くと、フェイトは頷く。そしてリンディが何かを言ううとすると、なのはが急に話に割り込む

「フェイトちゃんだっけ、どうしても一人で助けに行きたいなら行けばいいよ」

「なら行かせてもらう、行くよ。アルフ」

「でも、ただじゃ行かせられない。私と戦って勝てたらいいよ!!」
「ちよっと待って、そんな事認めると思うのか？」

クロノが言うと、リンディはクロノを止め二人を見る

「あなた達の気が済むのなら、認めましょう」

「えっ、ちよっと、かあ、艦長!!」

「僕も賛成するよ」

「どうするの、クロノ君？」

エイミィに言われ、考えた挙句クロノも許可を出した。そして二人は、仮想空間で激戦を繰り広げた

「アクセル・シューター!!」

「フォトン・ランサー!!」

二人の魔力弾はぶつかり合い煙が上がる。そしてフェイトはその煙

を利用し、接近戦をしかける。だがなのはもレイジングハートの形態を変えて、フェイトのバルディッシュを受け止める

「はあああああああ」

だが向こうの方が、パワーが高く徐々になのはは押され始める。だが先ほど、アクセル・シューターを撃った際に残していた一発の魔力弾を操りフェイトに向ける

「クッ：」

反応が少し遅れたフェイトは、何とかバルディッシュで叩き落とすが、向こうの得意なロングレンジの範囲になってしまい急いで接近して行く

「ハーケンセイバー！！」

牽制用の魔力刃を放ち接近しようとするが、向こうの得意な遠距離魔法のせいでうまく近寄れなかった

「ディバイン：バスター！！」

「クッ：バルディッシュ」

『プロテックション！！』

何とか耐え抜き、今度はフェイトの反撃が始まる

「行くよ、バルディッシュ！！」

『ブレイズモード』

バルディッシュが剣へと変化し、なのはは攻撃を止めるので精いっぱいだった

（クッ、早いでもまだ見切れる）

攻撃が少しずつ見え始め、なのはは完全に見切った後、レイジングハートでフェイトを殴る

「なのはステイック！！」

（えっ：何その技名？）

アースラ内にいる全員が疑問に思うが、確実にフェイトにダメージが行っていた

「もう加減はしない：行くよライトニングフォース！！」

右腕に雷が集まり、バルディッシュが電撃を帯びる

「サンダートルネード!!!」

フェイトがバルディッシュを振るうと、電撃を帯びた竜巻が起きる。そしてその竜巻は、なのはを取り込み竜巻が消えると、なのはは体が麻痺しているらしく、浮いているのもやっとの状態だった

「勝負ありだね…!?!」

フェイトが勝利を確信すると、なのはの周りに散らばっている魔力が集中し、傷を癒やしていく

「そんな…奥の手が」

フェイトは驚きを隠せず、再びバルディッシュを構えようとするが、ライトニングフォースを使った直後なのでうまく握れず、そうしている間になのははレイジングハートをフェイトに向ける

「これが私の全力全開、友達になりたいんだブレイカー!!」

なのはが魔法を放つと、フェイトは何の抵抗も出来ず飲みこまれる

「勝負ありだな…」

仮想空間は消え、フェイトはなのはを見る

「手加減したの…」

「だって、別に君を倒すのが目的じゃないもん」

なのはが言うと、フェイトは笑う

「なんで笑うの…」

「ごめんね、なのは確かに君が言う事の方が正しいのかも」

「それじゃ…」

「うん、私も君達に協力して戦うよ。時の庭園までの案内は任せて」
フェイトが言うと、突然空にプレシアが写る

「その必要はないわ。フェイトそれに管理局」

「プレシア・テストアロッサあなたの目的を話さない!!」

「その少女の持つジュエルシードは戴くわね」

「させない…スウェンを殺させる訳には!?!」

フェイトがなのはを守ろうとすると、突然痛みが来て倒れる。そしてレイジングハートの中にあった13個のジュエルシードは奪い取られる

「あなた達は見えていなさいその場で聖剣士のいやスウェンの最期を
ね」

遂に全てのジュエルシールドが、そしてスウェンが揃いプレミアの計
画は最終段階に突入する

第9話友達になる為に…（後書き）

遂に揃ってしまった21個のジュエルシードそしてスウェンの運命は…

次回第10話開かれた禁断の世界

アルハザードそれは…スウェンの命を奪い開く世界

第10話開かれた禁断の世界（前書き）

プレシアの計画そしてスウェンの命もはや一刻の猶予も残されていない
なかった

第10話開かれた禁断の世界

次元航行艦アースラ内クロノは、時の庭園内部の事をフェイトから聞いて、作戦を練っていた

「やはり、強行突破か？」

フェイトの言葉を信じる限り、強行突破が一番理想だったがクロノはフェイトの知らない伏兵がいる可能性も考え、強行突破は無しにする

「艦長：偵察部隊を送ってくれませんか？」

「わかったわ、フォン聞こえるかしら？」

「どうかしたんッスか艦長？」

「あなたに時の庭園の偵察を頼みたいのだけど…」

フォンは頷き、転移して行く。そしてフォンから送られてきた映像それはもはやフェイトの知る庭園ではなかった

「フォン、ご苦労さま戻ってきていいわよ」

「了解ッス」

フォンは無事に帰って来て、内部の映像を見る限りプレシアのいる最深部まで行くには相当危険が待ち構えていた

「さて、どうしたものか…」

「ねえ、クロノ部隊を二手に分けたらどうかな」

「どう言う事だ、ユーノ？」

ユーノが説明して行くと、クロノは納得しもう一度ルートを再計算する

「確かに、不可能ではないが危険度は同じだぞ？」

「でも片方から侵入するよりは危険がないと思うけど」

「だが両方に分断できたとしても、こちらも戦力を分けることになる。そうなればいずれ力尽きるだろう」

確かにクロノの言う事も一理あったが、今は問答をしている時間も無く、結局フォンの力を借りて侵入することになった

「フォンは最短ルートより侵入し、出来るだけ敵の目を引きつけてくれ」

「了解ッス。それじゃ先、行ってるッスよ」

フォンは転移し、なのは、フェイト、ユーノ、アルフ、クロノはもう一つの侵入ルートへと向かう。その頃、時の庭園内部

「ぐあああああああ」

スウェンは謎の機械に入れられ、苦しんでいた。そしてスウェンは機械の中で血を吐いて行く

「どう苦しいでしょう。でもあなたの死が私とアリシアを新天地へと向かえるのよ」

「グッ：止める僕をうわあああああ」

スウェンに反応しているのかは謎だが、ジュエルシードも光り始め、次元が開いて行く

「あれが、アルハザード待っていないさい。アリシア今行くからね…」
徐々にアルハザードが見えてきて、スウェンの命も限界に近づく
(アリシア、ごめん約束守れなくて…)

最後の血が垂れて、スウェンは倒れる。そして遂に開かれた禁断の世界プレシアが踏み込もうとすると、後ろに魔力反応を感じる

「母さん、本当にスウェンを殺したの？」

「ええ、そうよ。そして私はようやく見つけたアルハザードをそれじゃあねフェイト」

「そんな待って母さん!!」

フェイトは止めるが、プレシアはようやく現れたアルハザードへと飛び込もうとしていた

第10話開かれた禁断の世界（後書き）

自分の欲望を叶えようとするプレシアそしてそれを止めようとする
フェイト達

次回第11話君の思い出 前編

消えゆくスウェンそしてそれを救ったのはアリシアだった

第11話君の思い出 前編（前書き）

消え行く心、そしてスウェンはその中である少女と再会をする

第11話君の思い出 前編

??? 意識だけとなったスウエンは、無限に続くであろう花畑をずっと進んでいた

「ここは一体…」

あたりを見渡すが、見渡す限りの花畑でその中でスウエンは懐かしい感じを受ける。そしてよく見ると自分が良く知る一人の少女が笑って、自分と呼んでいる感じがした

（僕を呼んでいる?）

今のスウエンには、その少女を追う以外に術は無く追っていくと、景色が変わり記憶の片隅に残るある世界の景色が見えた

「これは、僕の過去?」

建物に触れるが、すり抜けてしまい、銃声の音が聞こえ振り向くと情け容赦なく子供が撃ち殺される。そして別の場所では、小さい女の子が男に囲まれ殺されていた

「止めてよ、誰か…助けて!!」

スウエンは目をそらす、鮮明に子供たちの声が聞こえ、また景色が変わる。今度の景色は、ある村が虐殺された時の風景だった

「うわあああ…なんて事を…お前らに良心は無いのか!!」

「その汚らしい手をどけろ!!」

村人の手を切断し、痛がっている村人を笑いながら切り刻む。それから様々な風景がスウエンを襲いようやく先ほどの花畑に戻る

「これが、僕の罪?」

腕を見ると震えが止まらず、真っ赤に染まっていた。そしてまだ子供の声や殺された人々の声がスウエンの脳内で響きスウエンは嘔吐する

「ハアハア…なんでこんなものを」

スウエンが考えていると、ポケットからエグゼキューターが落ちて、横に一人の女性が来る

「あなたは逃げるの：」

「えっ、あなたは一体？」

「彼は逃げなかったよ。最期まで生きる事を止めなかった君は言っただけ全部の罪を背負うって」

確かに、そう言った事は覚えていた。だが今のスウェンを支配するものはそれは恐怖だった

「怖いんです：これ以上罪を重ねるのが：」

「それじゃ、ここで諦めるの？」

「僕はもう死んだんです。今さら、何をすればいいんですか？」

「君が望む事、そして守りたい者：そして人は誰かを守ろうとする時、無限の力が出せる。君がまだ生きる意志があるのなら、手を伸ばしてみ、君を待っている人がいるから：」

言われたとおり手を伸ばすと、確かに温かい温もりがスウェンを包みアリスアが見える

「スウェン、戻ろう。みんなの待つ世界へ：」

涙を拭き、スウェンは頷く

第11話君の思い出 前編（後書き）

様々な罪だが少年は生きる事を選ぶ

次回第12話君の思い出 後編

本当の物語それはここから始まる

第12話君の思い出 後編（前書き）

全ての終わりそして始まり…

第12話君の思い出 後編

時の庭園プレシアはアルハザードへと飛び込もうとするが、誰かに止められる

「スウェン、邪魔をしないで!!」

「プレシア母さん、僕やフェイトじゃ駄目なんですか…」

「私はアリシアの元へ行く。スウェン、フェイトあなた達は私から巣立つ時なのよ」

スウェンの腕を離し、プレシアは閉まって行くアルハザードへと入って行く

「母さん、そんな事をしてもアリシアは喜ばないのに…」

「スウェン君、逃げるよ」

ジュエルシードの膨大な魔力に耐えきれず、時の庭園は崩壊して行くそして脱出しようとするクロノ達の前には、制御不能に陥った魔導兵が大量に現れ、道を塞いでいた

「クッ…こんなときに…」

「クロノ、お願いがある。僕があいつらの相手をするからなのは達を連れて離脱してくれるかな？」

「スウェン、初対面にしてはずいぶんと馴れ馴れしいな。だが今回はお前の提案に乗るしかなさそうだな」

クロノは全員をまとめて、最短ルートで脱出地点へと向かう。ただ一人残ったスウェンは崩壊して行く時の庭園内に存在する魔導兵を倒しながら、脱出地点へと向かう

「さすがに、敵の数が多すぎるか…」

予想よりもはるかに多くスウェンは苦戦しながらも必死で生きる為に脱出地点へと向かうだが所々に穴が開いておりうまく進めていなかった

「クッ…脱出ルートが…」

既に次元の歪みに飲み込まれ消えており、スウェンが落ち込んでい

ると、アリシアがスウエンをある場所に案内して行く

「ここは、大広間？」

だがスウエンが大広間に着くと、同時にどんどんと次元の歪みが迫りスウエンは転移魔法を展開するが、遥かに向こうの方が早く間に合わなく、次元の歪みに飲み込まれてた

「何も見えない、今度こそ死んだのか？」

体の感覚もなく、スウエンがだんだんと意識を無くすと、一筋の光がスウエンを助けた

第12話君の思い出 後編（後書き）

全てが終わり、フェイトは自分の罪を償う為管理局へと向かう
次回最終話そして、明日へ！！
今それぞれの未来が動き出す！！

最終話そして明日へ!! (前書き)

本当の始まりそして物語は次の舞台へ!!

最終話そして明日へ!!

あれから、1週間スウェンは高町家で暮らしていた

「終わったんだよね：スウェン君」

「うん、きつと母さんもアルハザードで：」

空を見上げスウェンが言うと、なのはの携帯が鳴りリンディから電話が来る

「もしもし、なのはです」

「なのはさん、それにスウェンも一緒よね」

「そうですけど、どうかしたんですかリンディさん？」

リンディが話していくと、だんだんとなのはは笑顔になり頷き、電話を切る

「なんか嬉しそうだねなんだったの？」

「フェイトちゃんが、管理局に行く前にお別れを言いたいんだって」

「そうなんだ。じゃあ行ってきたなよ、僕は待ってるから」

「何、照れてんのスウェン君。君も行くんだよ？」

スウェンは訳が分からず、首を傾げていると、無理やりなのはに連れられ向こうが指定してきた場所に着く

「来てくれたんだね。スウェンそれになのは」

「久しぶりだね、フェイトちゃん」

「なのは、君が元気そうで良かったよ」

フェイトは笑顔でなのはに言うそして、スウェンとクロノはそんな二人のやり取りを見ていた

「友達はいいものだね、クロノ」

「そうだな、それよりスウェン本当にいいのか？」

「うん、僕はまだここでやる事があるから：」

「そうか、スウェンだが気が向いたら、たまには連絡くれよ？」

スウェンは頷き、話し合いの終わったフェイトが来る

「もういいのか、フェイト？」

「クロノ、最後だしスウェンにお別れを言ってもいいかな？」

「ああ、まだ少しは時間があるからな」

クロノから許可を貰い、フェイトはスウェンに向きなおる

「スウェン、元気でね」

「うん、フェイトも元気で」

「じゃあね！」

最後にほっぺにキスをして、フェイトは帰って行く

「スウェン君、最後フェイトちゃんにキスされてたね」

「見てたんだ…」

「当たり前だよ。それでこれから一緒にいてくれるの？」

なのはが聞くと、スウェンは下を向く

「別にこれが最後の別れじゃないよね」

「うん、多分ね。じゃあ僕は行くよ」

「待って、最後に…」

なのはにもキスをされ、スウェンは笑顔で新たな家族の元へと向かった

最終話そして明日へ!! (後書き)

新しい家族それは優しい少女だった

次回第1話呪いを受けし子

これで一応、完結です

次回作は魔導新世紀リリカルなのはA, Sです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5433q/>

魔導新世紀リリカルなのは

2011年2月18日12時57分発行